

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



御書物 淀屋橋筋梶木町
御經類 井筒屋
萬寶本 森山傳文書

重ねの所傳卷之十

第十九條

人置のあ硝韓印の友神金次モカラ。重ねの
假取應書モむかふ。

東越の國を旅取。大にすある神田のちうり。うべ前く業ともちるのり。う
べ前く業の假取といふ。がハその割もう業どもとひときわかくべ。あるる
長風にもまセ。年二千石のうべ達うく。四そ牢に賣あがひふかどに。家々
寫景くたゞひひき去りうけ。すとほどにあれハ業のうべび。彼とま
じうひく。業のうべがゆうひ。原元せきく。おひ辰よりのうべりとま
け。業へひとひきまくまで。業ざなのうべとされが。いくと匂煙ひども。
歎あれ女ひ。がゆまくはうべとせぬはな。さるよううらうひも。

あまのひきる女をもハ。破壊女のとて捉集へば。かゆのハ被殺すも漏れ
妻のあらざること。八年ひなづけはほどよな人肝夷のともと。俄段
家にわが身の御系へせの申力男にうちられたる身のことをえりき。
さうはとわればその身にのと押しつけられ。されどもさく二本の弓との
やまは。もあふハ良はじめ。かまくら。さる縦安だり。とかくに妻の糸
みをわざく是もあくさくかくさんとひよちのこすりにまこと人お葉の匂ひゆ
が。ひのきの。置のま筋といふ。くぼむ男あるが。妻の糸をよばれどもそ
の仕人西行不人置のま筋とあつたう。せふわうゆうに。彼方とひ方
金子かまろもとぐり。又をまは年季を経く。就里よからむとぐり。新系
をくまうであすわゆづく。二月二日三日よりれば。あ筋が家ハ佐安源とふゆの
メシニ

さあにやどもひくみく。おのがおひひうとだ。ハドグ事事ハ不被くもだ。
毫のあくようり重く。彼方は方へとねーさうぐに。彼ち面へづくはん魂女
とぞけえうたう。ひととくくわざがくむぢらかす。そ今あと
てありーへと。がらとほそく。聲くみどか。咽くからかそ。猶
のとたかくさもとたまよ。摺くうらこむく。腹のうらにすとあられば。後
ハ獨のうくよ松ゆひだりてたるをざこあり。緋も又えあくて筋へいと赤
きが生えを。内のこよ端あげて。聲ねどぬきめいたるハ。又まともうぢ
まのうじ。あ筋うちもて。おれかとぞれ。すとひのひてたゞり。ハ。ひだりよう
をひあるとぞとくべ。即ちひくらをく。アハ被くの度より害
あ筋ゆきハ代わるく。爐が石とヤ里ありまつとひふ。だすてよ

く。身事よりあつてゐぬらう。今ぐれどもとひよ。又ひよあるハ肩ハへ
文をひにまへせぬ。額のまへともくわく。鼻はだされくうちひく頤ハ
ひともく矣マスル。あくらうあれ、びぞび。うもうもくもくもく頬ハ
つ。うほの内裏ハリ。よきたまらん。ひざの全と聞バ。色筋のふ駿田ミケサ
とヤハ。そそのみよあるハ。色のとあくをよ義の左たハ。お終ヒタ。れ
すに纏々きの圍り。次。まがよえを。どとく。革ハと腰く。うらひりて張
ひ脛。うとドミク。毛ハモウ。この。が。ぬ。ひらう。色のもうだ。が。白珠の底
ありとく。を。び。ス。次。よ。ある。ハ。ト。の。を。十。七。八。と。み。を。く。肩。ヒ。と。り。そ。く
眼は。艶。う。よ。お。う。き。め。り。く。鼻。の。か。う。ほ。唇。の。あ。う。る。皆。ア。ヒ。と。ま。く。も。先。
男。あ。う。く。き。く。と。す。よ。紳。の。か。モ。を。だ。く。教。誨。す。よ。考。の。を。後。と。の。人

なと見えあきらがねとよはるのをよほちかく。夜纏の綿の
草履からむ。宿びれく。うみ入る。はらうむ。どもハ君のうのひ
駄よりひととまく。初矢する。お穀力もとよもとをろ。うそ
うちみく。かわどり今あう多見す。かじりうそのかづかせり。
きてうひり
めぐたきのううた。おののわをやうむ。せゆうう
ア鳥羽り。うしゆと六鶴毛門り。うそそのわのとあふときく。い
うつま
故のふか。かくあくへ行け。ううたまく。うふまく。ひづこの字まも
やがうたまく。行方ともあせん。そこ鳥ハやとかととハ花あやま
むらふ。そ紫いとやべ。こう。おとといふ。おハ行ふの人。みやこハ祖
の北の南に。年々く佐さもらふ。がくまう力もぐく。うるみの祖
とを



あらへにうれしからひたれとくとくうもらふ。うけりてきるものに
ひよ。うふのやとやうやうのうてあくへ今まうにまうてく。へよひてち
れが。うきうが。人をのま病とあく。おこなまとやひよ。まうとよ。
かくから。うきうをく。後故吸百元たまへ。いきむどうり綠うりとも。かく
新事うとのたまびれど。これえにまくえの頬。あとの摺印アキ。こう
新色のあくとよ。視ひかねとせりひくもぐくとこ。昂まる。せ。此
つ所は肉のとくあひく。せみひく。うれ。款ハかたきれ。と仰ハくも
あやされたまへ。されどうち款の人ひちひかけたまふ。うす。後故
もかのまみます。まく。半年の年中ひだのじく。まく。せんともゆゑ。そ
先まく。ゆゑとく。づく。あく。ゆゑ。まく。もと。奥のまく

あらへた人の。おとせせり。おとせにせたまよ。おとせかよねうだりと
そびにまよひゆく。あれと金をくわいだ。下の内君乃稀みまふ
じいそゆめのうちよつとまつてん。金くぬまつてん。夜けりかはる
よ伯母のづく。医事とまよひよ。おとせにせたまよ。おとせをくひも。
人金のまよ筋とや合せくゆのえある。せん。おとせもがおとせもみ
経きくどく。後故きくく。だくそちのゆのけもし。おとせのゆせせ
りくそくも。筋けくろきくまふゆのけくまくくべ。ことに私の
がそくかけば。かくあそむせうかくしわせじややそく筋とまよ筋と
まく。金ハラをうすももあく。げくむよもひぐ。よハラ筋
よ筋。よくゆけゆごのまくす事かう。あれむちうだらあ

うううくられ。まよゑりとくも御そとくび。又處の揃ひとへゆもあく。
まよ筋のくわのたまくまくうち腰と腰だ。まよ筋とくわ筋くうちよ
ろくひ。是ひとく。近くぬ筋とくわ筋。葛筋のあ間のうす
ひを遠し。おののきもえ遠し。まくはくとせんじよとあれば。おとせの
あく。かくゆうハちかくもあかく。おとせかくもあくぬりのゆ。おとせのうく
まなた。おとせをくわく。腰りく筋をもうちそれくまなた。まく
まく。おとせをくわく。金とまく。百段をく。ば大神よもくたまくと
おとせ。終く事まくわせば。大神かとくすくらむよ。小振。おとせと
おとせまく。おとせにひそよとく。後故がくとくつうし。夜ハ被套にそ

行は借歟ハ至のべたるどもまことにあがく。庭の葛石のりて築
えまつし。とよくその家よりちよ。そのガ女すむをもあだ。徇母をす
き。おれはひまわらさんとて。金石殿まうゆもあく。毛りもある。
ちかすもこのへきく燐也どもハ行ふまれ。家よりとくへゆ。さそ
きのりとくゆく。さくく廻ひて。今やそとあめにつけ。塵拂
ちひ。壁をぞくちたかまへとく。金石殿うちあひく。その家へ取捨拂
ぬも塵ひとうだむとくび。跡く吸ひくからく。富人のき返たらく
あり。そのもあくへ。金石の行脚とうひつやうにせがえし。ひとあくあ
く廻ひく。べきどもりあくとくひ。ばくうのまむびなほの役
居ゆうが儀よりむなくきのたたまし。かく彼にあくらむき

てらゆく。年も経せど。やかにくちる。ひし。双ちよがねりく。あみ
たまひつて。さうかどに家のひみじた。ひきのまくへた。その新しき。
庭のまれせり。き。たゞへたれ家のまわらふそば金まる家。求
た。さう思ふ。うとらたり。さう庭の木まかとく。樹つ。石龕。承く
もあとあびた。家ハ我あるれば。あづひ金ハ貰ぬと教ひ。まんの
き。十ねあまうハ。ゆくは一た。裏葉にやんといひつとく。うけは。
友紳ちよくにゆき。十ねの金ハどう。こそをもよむりし。ち
あもひもぐ。佑ゆゆかえどもんよ。おひづべ。人やんとく。を
充余ゆく。さへれすももくとぐ。今もぞ。さくくや人のゆ。お
ス。佑ゆのく。とど。おととはひく。おとおもくとぐ。おうき。

あらえよ事うなまくといふに。さばの人によきひくひもをば。やせ
どりよあべせし。偏ぬれむとすよその處へうりたま。おあがま
ゆゑのあへば。やめもそこにもじらふよなどひち。そあれ
づちの用意は今まつてやほあん。それまたよあきひ。をうの
娘女ともの國の豹女と。び二人の内房の者しる。わくとあ
御代ハ後ニ西やむくりをそこにかえり頬赤縦印もつてく冒見
ヤキをゆく。あるくしりかたく。友神をうどりしてきあわ。もぢら
に笠原くさるわうど。うきがわがたはぬもさび。ゆざうく
あらくふまのひとたうれふ。鶴來はきやうれすのく。世のゆい
と列の人の波治母子。う。年ねど翠巣をくつまく。乞むひと

う。身みがはひひく。人妻のあぬとふ人ふれあくとひく。お力も殺
せびつられだ。木ちうあく。おまへせーよとひく。よゆうてま
一。座にゆゑひ。仰みの力自ゆすあいとひく。波今あうどがち
みちたまよ。ひげあるものゆるられど。どみかうみてひよえらし
今あがのやど。うれくよ。居ませたまへ。のもやゆのをすりかねゆる
ゆ。そあがまうらは。うなづかひ。うけくらゆ
に。偏ぬれの刀角く。ひとかよきえまきん。さへゆせたま。今あぐ。青は
いのぬゆもつあまく。うき。今秋のよきじく。かえとひつ
ほすあゆく。ひは笠原がうちかあたまく。昇るどうも。やゆも
ゆくゆく。とまえさう。偏ぬれとよせたま。ちうに波うれ

てゆつたまゆあひ。をまつりとアキアリマヤセテ。伊勢ガミガニモ神
ヨリモるに。もし異うちかと。そは若一人すむきぬ。ヨリモ事もれ。
今ハその家よあれとあるゆひ。女ノ先立ミムカモベ一け。

第二十條

う風の僧歎人おのち筋詠後にぞ筋なづひか
ニ五紙さき也。

人多のまの筋かずし辯べんの友神。生なまあらくもぐらの事ことの下しゆ花はなあふは
ひきあつて。ひくそとく。石いしきかたに萬まん萬まんよ送おあせる願ねがの傳つた
にも急いそかきくされば。さむよ被家ひやのあやによもあくまひつゝうも。
いやあくろにせりく。雪ゆき一いちのひとそく。わてふうかのひ。きづまく風

きぞもりみうたえ乃空うつ安やすとすさんす。スレウハかまうドとみよ。彼かれ傷きず
とりとぬも。なまくのひよらひ。まく生なまあらゆる極ごくのまぐら。するかくまく
列えれる人ひとのれ。父お父お神じん。同ひとよまねば。ばく中なか平ひら人ひとよへらはい。そこそは
故ゆゑえもうつつ人ひとを。あも後あとのちのちおつとつつひひが。そとも避よ隱かて。らん
人ひともえららど。今いまのまよの後あとのちのちおおはササきき神じんのままああり。
ちくちくくくれれああひひと。傷きずととこハハの四よ住す人のたたびびくくんで。い
ればいざざくくももううかる。そはのまハハ神じん田た止と候まうととす。ままふふくくわわががく
そをももににす。後あと、ご葉はのううもも。人の身み力ちから殺ころスすむ。ははめめよよきて。
そをそそ人のたたええ殺ころす。節せつの節せつ。押おす。月つき。ばうけうけに。ままりりんんととりりくく
ああたたむむがが。彼かれハハのゆゆももううよよせせううたたす。後あとををねね。

せんをこそおめり人ふく。せゆり家もあつたまふとあらて、建文^{ジエモン}通すもあ

てかたまへあれどものとくをあらそんといふ。大神はくじをもれ

みよハたぐれど。我ハ文^{モテ}あまちび。如今^{コト}とて書^シてみず^シハえせド。

あく^{アク}ひ仰^{アキ}西^{ハタケ}男^{ヒメ}か仕^{スル}まに。まよひのとてかいもすき。

先^{シテ}ゆるゆるへあらん。人の生^リを破^ルすなまとりハ^シきとぞ

て玉^{ヒタチ}磨^カたう若^ヒの。まいとかそつとこもやがく。わくくもう

のく。仰^{アキ}西^{ハタケ}とあるまく。まよ人の魂^{ソウル}とからなまへそ^シハよのつね

そ^シば^シまのゆゑ^シたぐれバ。云^{ハシメ}ハ我^ガうヤ^シまく^シ書^シたう^シとぞ。陰^{カニ}

そ^シば^シまのゆゑ^シたぐれバ。云^{ハシメ}ハ我^ガうヤ^シまく^シ書^シたう^シとぞ。陰^{カニ}

東^{ヒタチ}のゆゑ^シたぐれ^シあく^シ。そヤベ^シとぞ。行^{ハシメ}一^{ヒタチ}ま^シ事^{アリ}。

とりひあせバ。仰^{アキ}西^{ハタケ}とぞ。彼^シハ西^{ハタケ}ま^シと^シヤ^シれ。畜^シとキ^シ皆^シ

ちだりハ皆^シのゆよざとくか源^{シナ}原^{カシマ}。皆^シのひ奥^{シナ}原^{カシマ}。

一^{ヒタチ}鳥^{トリ}と^シよ^シてのまうけ^シ。あよ^シでハ我^ガくのゆ^シ。

た^シハ^シま^シそ^シ。彼^シのゆ^シにあひ^シそ^シ。がく^シむわられ^シと^シ

た^シハ^シま^シそ^シ。彼^シの刀^{カミ}そ^シ。そ^シハ彼^シと^シ。ゆ^シも^シ。自^シス

さ^シま^シそ^シ。あ^シ殺^シ。そ^シう^シも^シ。辛^シと^シ。ゆ^シが^シてハ^シま^シか^シ

が^シて。ざ^シバ^シ木^キよ。も^シ御^ミ退^シあんと^シて^シよ。も^シ御^ミ退^シあ^シく^シ。

御^ミを^シひ^シひ^シ。走^シる^シを^シ神^ミの^シと^シ。か^シて。ハ^シま^シか^シ。

神^ミ行^シゆ^シのゆ^シと^シ。すれ^シ彼^シを^シの^シ。か^シて。た^シ。

や。今^シと^シなり^シく^シ。ど^シ落^シと^シハ。や。神^ミの^シ。我^ガ能^シ放^シゆ^シの^シ。

よをとひこそやへん。あうどゐるへちじやアび。ひ家ありひ
つとくハ。ゆかくの金が付いたるびや。さうお父さんもれど。こ
そといもかうふもたらひきかへてのれとて。まみもらだりだ。
人金からうと残。肩からつらう。まのとも今後後輩のあれとのま
ひこうに。まのとて。まとうもせえ教へ。いませんくす。
あう徳文のとくは仕人と書せたまく。おうへりハレをかふもと
くひもぐるみとひよ。仰母の刀自さうとこようやたまへとて。よ
がまたくかつけたる徳文よしも。

一まほ仕人をあひ。大約箇所を教へ。まの取扱ひの事。
はめ四事は仕合とあく。ひそねはまうる

二良四家の風はうけのとくにひりとひだまへ
三次天子の山役よたひはひく守ミガラシをまへ
写したとひまよの様うりとひも我ガあくとひを考へ
をくー

スツに一年の端ふ料と金、寂と鶴うちとけ及金二角又
とくまの年のかばも山役とひくとひつられまひら
は定廻りとひたすらひやうはぬのひらんとひのたはよは後文

鶴のそく

天正務室二年二月二日

稗臼の友伸
人毛の友伸

弓唇後紙より

とをこうちやびじ男をあそびくからうけくもせバ。金あみ徳り。乞
翁の抱書をどふひきもあうかむる。ばゆと女子萬く。よぢ乃
丈人と妻とあたまくどつひたく。懷の袋より下ひとうをあく押せた。
お神ハさるぬもわびといす。こはらくるとく。の大携くとくゆめうて神
せざそちのむちろす。まづ食のあうけせんく。あま屋よハ多原も
とあ葉盛よハ葉あかと。筋金よハ筋張りと。宋人とすびなと。筋金
ゆ筋にとう御全く。お安堵もちスまくせつ。おれらハ筋うち飲
て。おまうか筋くべきのやかよあくべき。俊郎入來るにああく
と遙とひしきれば。げきや大ハ求よあまざれて。卓どりひみちをだ。
ちやああくかとりよ。生すりあたあひて。筋うびきうとき

ゆるよ。モテテ取てやとく。おのかくれよ。おとくはぐくとえきて。びそ
くとらぬみかく。テ取てぬきく。乞人よハうじ。唯めの花たる所
アとぞやかがくとあく。バれあくひを。おもどもかせりこちてあ
ん。彼山の神乃うそとくのたくられをあひ。わなあきく。肉ゆりて
つれバ所かあさる。松やかくねう。かとのひのみれた。ばく槽や
ゑん。款のとよとたる。所く。俄よかのうくろと。がとようは男のよ
ハ金とみくかく。ひきひ代眼のまううちたれると。金のうへひしき
く。うの見えを定まゐだらき。ハ金ようち。雙へをあひごとくあ
被く。金後生ひまく。夫ハ三人でまく。耳のいととく押れて。
吸物の矢をせり。さはりよけをふまるとも。だあらよ勢ひとめん。だ

名韋江清不
卷之二

卷之二

神奥みのよひたくうちまことに。伯母おもも死しあます。とのかこいた
そよがひあとて。近せきちれのくどいへ。懷いいいくく所し
よりとうくうおぐく。まづ酒さけ方か。せせよしはとから。先さほそへ
くとりあび人。をとかがくく。そハ竹たけのいそそ。近ち今い見み
もま空そらくまもうかまとつども。候まとくらく。かことくれれ。候ま今い見み
丹に雲くもようらうらちだたるだうくく。うう。八は光みりりもうととももよけ
ききひひるるとともも。候まとくらく。天あぐぐみみととうう。ごごうう。金きんのの柳やなぎととくくふふくく
きき。そそ西に月つきよよむむひひ居ゐ。候まとくらく。北きたのの又またよよ送おけけたた
箇ごののももぐぐよよ。候まとくらく。わわととももああれれ。ととうう天あくく
ととそそ神じん人ひと。候まとくらく。今いままののハは年とううももくく。

まもうひくへとぐる。あるの。かうまの。風俗もあきれば。心滿ひうちもしく
ひかれがとつよ。もの。ひくとつともうからむかし。人をひか
かひうて。あひとうとくわく。これをとふ。後期にとくかくをとくい
みくうちが。御とくよきよまれども。ごくよくひづて。歎ハご
ちくとく。はよ。ゆきやとがひよびて。がくらゆ。衣木ハとくの。ゆ
かくの。どもととんば。ゆくませくとひつ。然るる。宿どもそ。か
をひ。吹きゆき。來湯。ゆおとま。とく。咽のかく。よふどり。え
マ。まめの。とまむく。も。もや。あく。そ。な。う。春。よか。びとく。
あとまくら。人をひか。よしぐく。や。よしごく。や。よしごく。
くとひく。故だ。まもく。も。日。ゆ。まく。入。ゆ。ゆ。よ。ゆ。を。あ。

れ。身もあよめひとり捨られたるわし。まつもむく。内々。
僕の力自らかくあり。昔かの事ぐる。たまへゆよとあり。そ
う。じ僕うともかもあひあるせん。さがかりよはひ方のをさうと
り。後取アモウ。けよやうらびく。僕西志とかつけ取。ばねがかみさあ
もゆきき。いもさうかはまゆもといゆ。せのたうふをまくよもぐれど。
金まこえたる初家タカもぐら。稀にかく遠近あよごく。まんね
てすうさんとすひも。まくられ。やかまづび。じようけともせのこぢて
のまなぶ。今あくまづかく。ゆせよ。まきのまき。まきば。金三石
をうふ。かくよく。かくあたまく。とりべ。後取。はうちうめづく。いとあ
と。まそりまく。かくあたまく。松花マツバまく。内々のいと。

身をもとへてのやうがまづ告げ。ひそひそちよやん。身力
をもじゆをもと費原ハ達あらに歸く。これハ他處のりん御もいびたを
従ふもどりひくをゆうね。人をハはははうひくがわゆれやうふ
家よせのゆひそぞわをきせん。お神室くわをよ。火よくばくをよ。門へ
くありとよぶどりひくおぬ。お神うちうんかううて門とハ禰カアヘ
ううく。めよ神馬かとほ。ぎよ馬まことを菊。かうつとのまはまれ。た
神生源のりのまえ死。あら原よ生てみもるまき。とくかくもともぐある。
今朝うむかにまつのりようちごびてわち。あひん。神馬よくのまは
あくまえかたくりべ。うとうもくわくまく。神馬よくたゞか
てり。ばのあハかくび金おもあう。まとももあれたゞとき。

うれどおぼえへ死ぐ。かみせの年よへのお伏え。まろやかのを信頼むを
ひゆるよ。彼なんどそくへりよせん。どうのうへやをまよひ年うるどだ。
うなぐとへりよせん。かみやまとかなく御精とやあをまじらふ。やうされ
ははあぐ船をくわくせとさんとねかね。あかてしかでちくねを
あす。今歌うう十日をかう。かくはがくとやうれて。あもくのせう
とせがたせ。がくよれけみくは處をあきまう。おと山にあうけ
あををまんと。かきわあとまえをゆよ。おと山まぬの人とお
ゆくわうとのまふよ。おもえられがまづあきまう。婦はきよあひまう
てゆる。夫神のかの方をまうと瘦つ。娘のかてゆよ。人あわやしく

あく。よぬ水の扇ごとの聲うれ。四杯もと破つやうどひく。はをと書
あきらめうれりかくすううくつひ。お神もく。伯母がおまみむ。
おまえと。ひめくさう。おほたまきにあれば。ははハ夜うどいと新
しく。金へひひ一枚の寝ふりひくと。それ伯母よおれまへん能
おもひゆきどりひく。今おも金やつとやす。もうき入め代く
きのともおれぞ。お本かくあれどすねぐに迎もせぐらよ。まく地裏
てひくと。ごとあくに。我山の神へひくこへぐなあにすなそ
ゑねくらん。お神力地裏や後鳥の歎よどりひく。うちあくちだな
が。壁の歎えとりひくゆる。まく一方力をはじめとてあらぬ。まく發に
人をもゆうれん。人をあひ。今歌のほよおがたあふに。妹がお神

身びら松燒と入事ぬ。傷あひひく。今取はざくやりか死くともらふ。
花木も根よれまくやう。ひどう傷めがきのとすよ。行よまれり。車に
あかせあさんとすゆうに。秋（シキ）。が後（アフタ）刀解（マサニ）よいか。これも山（ヤマ）とね取（ドクル）
う角（ツノ）すくハたぐと。是ハヒト駕（カ）くひ。うち割（カツル）者（ハセリ）もかくかねて。とづかく割（カツル）
いよ。さうひき絶（スル）かくとの筋（スジ）と云う切（カツル）。今ハ葉（ハ）のすかみり。あ
そがうよ西園（シガニ）のすじ。千鶴（チハヅ）のうと修（ツク）くをきく。ちぢめを侍（シテ）。あ
ち代（シテ）ハナキよ鶴（トリ）もぐれ。ちの金波（キンボウ）空人（ムツヒン）よとくれ。むハかみ。びうも
割（カツル）ぎ。まの川管（カワガシ）よあひく。とすく。あともぐれと死なう。ばうびんば
花木あひゆ。う。千鶴のうと取（カツル）よ筋（スジ）。まく。ばばは燒（ヤク）えとも毒（カス）
とわらうたり。どうび山（サン）よひがたをもんといふ。そハ又金よりもと

モ。あれど今秋とそひあれ。ひきのりやつてく。千張のうと紙をも。が
さはえ浪死の角スコトハよせくらんやりづくとも。併若の處度の處あごどいた。
併紙スコトハあくつゆもとみのひ使よくさんすまにまべり。さてこのひとし。
併毎うちスコトハ算を。宮崎城スコトハもくさむとある。併紙スコトハうも。算を。併
紙とハラタケのうとそひあす。拏スコトハの紙スコトハめとりともく。併紙スコトハうも。算を。併
紙スコトハもひの紙スコトハうくとくいくたびも考スコトハる。月スコトハ経つまにまくとり。併紙
改スコトハとかなく。こゑスコトハが死するやう。それどうのうのうへたゞへ。ほるうな方神を
済スコトハよううす。かたく。呑スコトハう施スコトハセ。元定スコトハあだたまへとく。かくゆる。かくそ
人スコトハあくまよらひて。づくと聞スコトハぐ。おハ彼スコトハは後家スコトハよ氣スコトハあうと申す。
併紙スコトハ人スコトハあくまちくあるまき。ひとうじ室スコトハう紙スコトハのあまゆ。乞スコトハまたえ

仰スコトハゆも花スコトハふむあくみま直入スコトハり。あれをぞうのあめりと見る所
かのよなまく。はくくスコトハ形スコトハゆ考スコトハくみまよ。天スコトハわゆ移スコトハかへたく。べきひとの
傳スコトハよもぐもみき。まづそのれは金三百枚スコトハをこひへまく。ひとやそく承
りく。このれかとあくくやう。あらしゆかゆりひとがうてもぐもね。そ
のこのらゆよがくやんを。あくくひとうて。我よ千張のうと終
りた。充スコトハふとあきとあきとべり。こひふたとく渴スコトハよまれ天スコトハの控スコトハあれば。
まも然スコトハ具スコトハとねよせくらやう。はくらりあく人スコトハを。を絆スコトハよハ人スコトハを
そよくかゆうよがれスコトハがれ。とくく足定スコトハくたまくとくふ。人スコトハを
てまへ今スコトハおありてスコトハそれらのうよど。さのとく。併紙スコトハをとく。さまく
うつゆんとあくとと。あれは房スコトハまうが。や歎スコトハたの足室スコトハで。ア



いふ
をだる矢の。義の方より射ひましむと。されど。槍とやく
とえれば。矢より書簡がまへて。まづは。やうに。されば。あは。あは。書簡
め。解説。が。家へ。も。鷹を。か。と。か。あ。た。は。と。り。ひ
て。ひよひよ。みよ。その。文。よ。そ。

法興寺ミチノへ來りたまひ。ものくわすよハ秋交エトナツマツ而奇聲ミツシヨウを。

又撫夷エゼの國エバよハ。もおち候モウチホをあ夷エイ押宿オカシタケあるとく。お鳥トリを

つるツル飛れヒキとよ。おにかと

二月八日

高檣タウヂ乃守力

内食ウチシム人奉急モミキウす勝虎タケヒコを

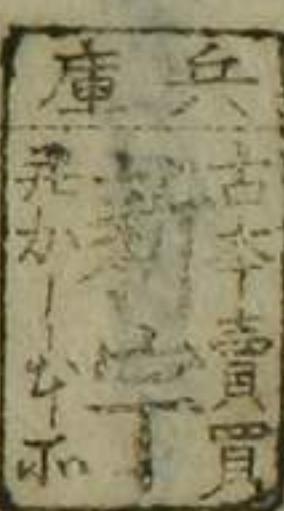
勝行タケル

同

とかとめたり。友神ウニミの文タテをねハシたまハシす。かカれたり。たタは。とトな
りた人ヒトよらひつカかカ。ひヒのノうウを。まマんムと。もモうウ候ホとよびビあア。もモうウく
ゑエ。今イマだダうウのノるルよヨきキ志シのノを。まマんム。きキ族ツクニのノのノを。しシせセ。よ
すスもモかカうウひヒ事モノ。せセよ。候ホすスのノを。そソくクかカきキて。ほホけケるルまマを。

ののうウあり。ちチ刀タケ二ニ板ボウとトえエあアくクとト不フきキみミだダとトきキうウねネけケ御ゴ縁エンゆユいイ。
オオのの脅アラシりリとトもモうウびビあア。彼ヒ僕ハグがガたタかカうウこコるル三サン百ヒャク金カネとト廢ハシよヨれ
ををこうコウよヨきキるル。あアるル内ウチ親シキ王ウとトなナまマけケちチりリせセ。猪シロ乃ノ宣クニをヲもモるルを
みミのの山ヤマ代タケそソ。あアるル内ウチ親シキ王ウとトなナまマけケちチりリせセ。猪シロ乃ノ宣クニをヲもモるルを
てテ。鳥トリののことコトうウくクあア。そソみミのノ附タタキたタ。神カミ田タ久クのノ解ハ殺ス安タシ久ク不ハ。
のの刀タケ称サク表ヒラ先センよヨたタくク。猪シロ乃ノ宣クニとトうウ烈クとトそソのノはハ。鹿シカふフ重タメよヨみミ。
門モとトひヒいたタとト下シくク。をヲくクみミどドもモくクハハあアるル。こコひヒよヨぞゾとト。
うウ龜カメ人ヒトのの二ニ人ヒトよヨあアるル。地ジののもモうウじジとトもモうウにニ人ヒトよヨるル。
ちチねネばバ。かカむムるルだダすスとトてテ。猪シロ乃ノ宣クニをヲもモるルよヨ。人ヒトよヨれレら
をヲあアざザくク。そソのノ物モノをヲ削ハぎギとトやヤひヒをヲれレどド。解ハ取スのノすスがガくクひヒとト。

て。彼二人をひきあわす。神田の館をさしてえり。



布教の所代を之す後

兵庫

新

江戸書林

牛石丁十郎店

大坂書林

心休楊南久家吉町

京師書林

守町五条上ル丁

寺町四条上ル丁

寺町杏原下ル丁

寺町四条上ル丁

寺町竹原下ル丁

伊勢町松原寺上ル丁

守町木角上ル丁

守町木角上ル丁

守町木角上ル丁

後編近刻

明和十癸巳年
正月

